

21

中国伝統医学と道教 (第35回 道教を研究した先人達)

吉元 昭治

吉元医院

道教を研究した先人達

我が国の道教研究の歴史を見てみると、いわゆる道教専門の方々(道教学者)を除いて、道教に関心をもち研究された人々がいて、江戸中期から明治・大正・昭和にかけて影響を与えた。これら先人の足跡を追ってみた。この中、今回の発表は幸田露伴を中心として報告したい。

先人達とは、江戸中期の平田篤胤(1776~1843, 没年68才)がまず挙げられる。本居宣長に師事し、国学者でもあり、医師でもあった。医師としての面は『志津の岩屋』に見ることができる。神道方面としては、『古道大意』、道教方面としては『赤縣太古伝』『三神山余考』『天柱五嶽余論』『黄帝伝説』『老子集語稿』『鬼神新論』『古今妖魅考』『仙境異聞』『勝五郎再生記聞』『幽郷真語』『五嶽眞形図説』『象易正義』『遁甲故実』『古易大象経』『神仙至要方』など多い。国学者として神道を中心とし、儒仏道を排斥し、その間を道教をもってした。

岡倉天心(1862~1913, 没年52才)。日本美術界の巨人、日本美術院を創設、多くの門人の中に横山大観がいる。道教に関する著述は『東洋の目覚め』があり、その他『支那南北の区別』がある。

幸田露伴(1867~1947, 没年80才)。文学方面では『五重塔』『連環記』など多くの著作があり、文化勲章を授与されている。道教方面の著述としては、『論仙』『王羲子』『仙人呂洞賓』『太公望』『遊仙窟』『列子を読む』『水滸伝』『墨子』『仙書参同契』『道教に就いて』『道教思想』など、道教について深い認識と広い研究をしていた事が分る。今回の発表では後二者を中心としてのべたい。

橘樸(1881~1945, 没年64才)。戦中から戦後にかけて、中国や満州(現東北地方)で活躍し、現地の社会に密着し、土俗を研究。道教に就いての著述をのこすが病をえて戦後奉天の地で亡くなる。著に『中国神話研究』『墨子の宗教思想』『道教概論』『通俗道教』などがある。彼の遺著『道教と神話伝説』は戦後間もなく、友人の中野江漢が連名で出版している(1948)。その他、古いものでは、沢村幸夫の『支那民間の神々』は戦時中の出版(1941)がある。その他、戦時中のものとして演者の所持している小冊子に以下のようなものがある。

『老荘研究の現代的意義』(小柳司気太, 1934), 『道教小志』(多田部隊編, 吉岡義豊, 1940), 『東亜宗教の課題』(国民精神文化研究所, 1942)などがある。

以上のうちから、幸田露伴の『道教に就いて』は、昭和8年(1933)、岩波講座「哲学」の中で発表されている。この中で主張は道家と道教を分けている事である。現在、殊に欧米では道家と道教を一つにしてTaoismといっているが、露伴は思想・哲学としての道家と、宗教としての道教を明確に区別している。演者もこの説に前から賛同している。『道教思想』は、岩波講座「東洋思想」の一環として昭和17年(1942)に発表している。この中で、道教の二大宗派、正一派と全真派のちがいに言及し、さらに神仙派、上清派、金丹派、符録派についてもふれている。また『道蔵』について三洞四輔という分類にも及んでいる。

幸田露伴は、文筆家として『露伴全集』にのこる多数の業績の他に、よくぞこのような道教の研究まで、それも『道蔵』を読破したのに相違なく、そのエネルギーにはただただ感嘆する他はない。戦時中、道教方面の研究は、現地の実情を知る上に必要性が痛感させられていたのではなからうか。先人達の御苦労を忘れてはならないとおもう。